
月の桂

cassander

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月の桂

【Nコード】

N7242T

【作者名】

c a s s a n d e r

【あらすじ】

伊勢物語より、独自に高子と業平、式部の君の恋を描いた物。古来の歌物語を現代風に作りあげた。和歌と物語の融合を楽しみたい。

行く蜚（前書き）

歌物語の系譜を継ぐ物。高子と業平の恋は、初恋と老いらくの恋とで、それぞれが切羽詰った悲痛な恋だった。

行く蜚

？

知らせ

「姫様、お聞きになりましたか。式部の君に、あの少将様が通われているのですって」

「どんな方なのかしら」

「それは大層な美男で、美しい和歌を作られるのだそうですわ」
「式部の君の事よ」

私は、指先でくるくる回していたしおりを止めた。木の素朴な物だが本を読むときは、いつもそれで軽く唇を叩いたり、指でくるくる回したりした。元は誰の物だったのか、すっかり思い出せない程前から手元にあつたが、きつと兄達のものだっと思う。飾り気のない木製の物だった。

「まあ、すっかり少将様の事かと思いました。つい先ごろから北の方様にお仕えするようになった、大層学識深い方だそうですよ。古参の方達が色々噂しています」

「お母様の所でご挨拶はしたの。きりつとした綺麗な方だけれど、親しくお話した事はないわ。私など、まだ子供だと思っておられるでしょう」

しおりで開けていた書物をとんと叩いた。好奇心は抑えられず、美鳥と二人でいつか少将様が来られたら覗き見しようと決めて、その日が来るのを楽しみに待った。式部の君とももっと知り合つてみたい。当代一という美男の心を捉える人が、どんな方なのか知りたい。春もたけなわの物憂いような昼下がりであった。このまま何事も起こらずお母様のように子を産み育て、一生を平穩に過ごすのかと、物足らなく思えた。もっとキラキラした何かが起こって欲しいと思うが、春は毎年と同じように過ぎ、夏も盛りを過ぎていった。

「お方様が、姫君に直ぐお部屋に来られるようにと仰せです。」

美鳥が瞳をキラキラさせて知らせに来た。北の対への渡り廊下を急いだ。庭の隅にくすんだ強い赤い色の花が咲いているのが目に入った。一体何の用だろうと思うにつけ、その花がほしくなった。

「美鳥、あの赤い花を摘んでくれ」

「お方様がお待ちになっています」

「今でないと駄目なの。どうしても」

私には、今、その花が貴重でかけがえのないという、不思議な切迫した思いに駆られた。美鳥が仕方なく、下男を呼び寄せて、二、三輪摘ませ、渡してくれた。緑の強い匂いが漂った。

「この花の名前は？」

「確か、“われもこう”だと思いますわ」

（私もこう思う。“我も恋う”）

指先に強い力が入ったらしく、また緑の強いにおいがした。

母の部屋には父がいた。昼のこの時間に父が母の元にいるのは、珍しかった。父は笑顔を見せようとしていたが、どこかにいつもとは違う緊張感があつた。私は不安を覚えた。母の傍に控えた、二、三人の女房達のうちに式部の君がいた。気のせいか式部の君の回りには、涼しい美しい香が漂っているようだった。長い黒髪的美しさと、私とは明らかに違う、大人の優艶さが妬ましかった。

「大事な話があります。あなた方はしばらく席を外してくれませんか。北の方と姫と私とで少々話があるのでね」

女房たちも、美鳥もみんな部屋を出ていった。それはいつもの父らしくなかった。

「お父様があなたの将来の大切なお話をなさいますから、しっかり聞くですよ。母も兄上達も、必ずあなたを支えますからね」

私はますます不安になった。一体何事なのだろう。いつも穏やかな母が、豊かな頬を固く引き締め、厳しい顔で語るのは、私には初めての事だった。

「あなたは、いまだに誰からも求婚されないのを、物足りないと思いませんかでしたか。それとも、まだ殿方に興味はないのですか」

父の笑顔は、私の機嫌をとるようだった。何と答えればいいのか解からなかった。私の対の屋はいつも厳重に童や女房達に囲まれていた。美鳥たち女童と、女房以外だれも簡単に近づけなかった。そんな風に暮して来て、公達など近くで見たことなど無かった。興味はあっても、想いを寄せようにも誰も見たことがないのだ。

「殿は、あなたがお生れになった時から、将来は帝の后にとの思し召しだったのですよ。ですから、あなたを大切に育てました。それは、殿も私もあなたの幸せを一番に考えていたためだという事は解りますね。そういう身分の方には一点の曇りもあつてはなりませんから、厳し過ぎる程にあなたを育てました」

美しくもなく、取り柄も無く、いたって平凡な私が、あの美貌の叔母様のように女御様になると、お母様は言われる。

「女御様をご懐妊なされた事は知っていますね。お生まれになる御子が男子ならば、あなたはその御子にお仕えする事になります。数年後には入内して帝にお仕えするのですよ」

お父様の口調は、穏やかながら有無を言わせぬ物だった。私の意志には関わり無く、私の将来はとづくに決められていたのだった。叔母の女御様の御子ならば、私には従兄弟にあたる。私は赤子の夫を持つのだろうか。お父様はじつと私の目を覗き込んで言った。

「これは我が家にとって大事な事なのです。男子ならば天子様になられます。そのためにあなたと御子にどんな支援でもする積りでおります。その積りでこれからを過ごして下さい。決して世の常の女性達のような生き方を望んではなりません。それがあなたの使命なのです。この国の全ての民の母となるように、自分を育てて下さい。それがあなたの幸せでもあると、親として私達は信じています。並ぶ者無き貴い身分に登られるのです。よく覚悟して下さい」

お父様の言葉が途中から虚しく空を舞った。私は無意識に手にした花を捻り、花びらを千切った。青臭い香が漂った。茎の緑が指先を染めた。お母様が見咎めて言った。

「どうしてそんな物を持っているの。お衣装が汚れてしまいますよ」

「われもこう」というのだそうですね。この赤が好きなのです」
お父様が、ようやく寛いだ笑顔で言った。

「あなたもそう思う」というと聞いてよいのだね。和歌の勉強には、式部の君がよく指導をして下さるでしょう。あの君は和歌にも漢籍にも長けておられてね。これからあなたに必要な学問や知識を授けてくれるでしょう。心して学ぶのですよ」

私にはお父様が言われるほど、事の重要さがよく理解できなかったのだろう。これから式部の君を通じて、あの少将様の事をもっと知る事が出来るかもしれないと、その事の方に心を弾ませたのだから「これからは式部の君と毎日一刻程学問するのですよ。学問部屋を作りましょう。必ず侍女たちも同席するようにしなさい。今日から秋枝が美鳥以外にいつもあなたと一緒にいる事になります。二人にも学問が要りますからね」

お母様は、私の様子を落ち着いた物だと思つて、明るい顔で、お父様の言葉に続けて言った。落ち着いてなどいなかった。どう応じてよいかわからなかったただけなのだ。

廊下には美鳥が待つていた。美鳥は、他の女房たちからこの話を聞いたらしく、すっかり興奮した様子だった。

「お生まれになるのは男子に決まっています。姫様は女御様におなりになるのですね。夢のようです」

美鳥は何度も繰り返して言った。手の中の「われもこう」は無残に花びらを散らしていた。何故か捨てられず、その後も押し花というには無残な有様で、長く私の文机に置いてあった。美鳥が捨てようとする度に、私は止めた。すっかり褪せた暗い赤が私に何かを問いかけた。私の心の底に、何か強い物が潜んでいる事を知らせた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7242t/>

月の桂

2011年10月9日04時47分発行